

源氏物語

花宴卷

与謝野晶子訳



一冊堂青空文庫

源氏物語

花宴

紫式部

與謝野晶子訳

春の夜のもやにそひたる月ならん手枕

かしぬ我が仮ぶしに

(晶子)

二月の二十幾日に紫宸殿ししんでんの桜の宴があつた。玉座の左右に中宮ちゅうぐうと皇太子の御見物の室が設けられた。弘徽殿こうきでんの女御にょごは藤壺ふじつぼの宮が中宮になつておいでになることで、何かのおりごとに不快を感じるのである

が、催し事の見物は好きで、東宮席で陪観していた。日がよく晴れて青空の色、鳥の声も朗らかな気のある南庭を見て親王方、高級官人をはじめとして詩を作る人々は皆探韻^{たんいん}をいただいて詩を作った。源氏は、

「春という字を賜わる」

と、自身の得る韻字^{いんじ}を披露^{ひろう}したが、その声がすでに人よりすぐれていた。次は頭中將^{とうのちゅうじょう}で、この順番を晴れがましく思うことであろうと見えたが、きわめて無難に得た韻字を告げた。声づかいに貫目^{こわ}があると思われた。その他の人は臆^{おく}してしまったようで、態度も声もものにならぬのが多かった。地下^{じげ}の詩人はまして、帝も東宮も詩のよい作家で、またよい批評家でおありになったし、そのほかにもすぐれた詩才

のある官人の多い時代であつたから、恥ずかしくて、清い広庭に出て行くことが、ちよつとしたことなのであるが難事に思われた。博士^{はかせ}な
どがみすばらしい風采^{ふうさい}をしながらも場馴^{ばな}れて進退するのにも御同情が
寄つたりして、この御覧になる方々はおもしろく思召^{おもほしめ}された。奏せら
れる音楽も特にすぐれた人たちが選ばれていた。春の永日^{ながび}がようやく
入り日の刻になるころ、春鶯囀^{しゅんおうてん}の舞がおもしろく舞われた。源氏の紅^{もみ}
葉^{じのが}賀^{せいがい}の青海波の巧妙であつたことを忘れがたく思召^{おもほしめ}して、東宮が源氏
へ挿^{かざし}の花を下賜あそばして、ぜひこの舞に加わるようにと切望あそば
された。辞しがたくて、一振りゆるゆる袖^{そで}を反す春鶯囀^{かえ}の一節を源氏
も舞つたが、だれも追隨しがたい巧妙さはそれだけにも見えた。左大
臣は恨めしいことも忘れて落涙していた。

「頭中將はどうしたか、早く出て舞わぬか」

次いでその仰せがあつて、柳花苑りゅうかえんという曲を、これは源氏のよりも長く、こんなことを予期して稽古がしてあつたか上手じょうずに舞つた。それによつて中將は御衣ぎよいを賜わつた。花の宴にこのことのあるのを珍しい光栄だと人々は見ていた。高級の官人もしまいには皆舞つたが、暗くなつてからは芸の巧拙こうせつがよくわからなくなった。詩の講ぜられる時にも源氏の作は簡単には済まなかつた。句ごとに讃美の声が起こるからである。博士たちもこれを非常によい作だと思つた。こんな時にもただただその人が光になっている源氏を、父君陛下がおろそかに思召すわけではない。中宮はすぐれた源氏の美貌がお目にとまるにつけても、東宮の母君の女御がどんな心でこの人を憎みうるのであらうと不思議

にお願いになり、そのあとではまたこんなふうには源氏に関心を持つのもよろしくない心であると思召した。

大かたに花の姿を見ましかばつゆも心のおかれましやは

こんな歌はだれにもお見せになるはずのものではないが、どうして伝わっているのだろうか。夜がふけてから南殿の宴は終わった。

公卿^{こうけい}が皆退出するし、中宮と東宮はお住居^{すまい}の御殿へお帰りになって

静かになった。明るい月が上ってきて、春の夜の御所の中が美しいものになっていった。酔いを帯びた源氏はこのままで宿直所^{とくいどころ}へはいるのが惜しくなった。殿上^{てんじょう}の役人たちももう寝^{やす}んでしまっているこんな夜

ふけにもし中宮へ接近する機会を拾うことができたらと思つて、源氏は藤壺の御殿をそつとうかがつてみたが、女房を呼び出すような戸口も皆閉じてしまつてあつたので、歎息たんそくしながら、なお物足りない心を満たしたいように弘徽殿の細殿の所へ歩み寄つてみた。三の口がぁいっている。女御は宴会のあとそのまま宿直に上がつていたから、女房たちなどもここには少しよりいふうかがわれた。この戸口の奥にあるくるる戸もぁいていて、そして人音がない。こうした不用心な時に男も女もあやまつた運命へ踏み込むものだと思つて源氏は静かに縁側へ上がつて中をのぞいた。だれももう寝てしまつたらしい。若々しく貴女らしい声で、「朧月夜おぼろづきよに似るものぞなき」と歌いながらこの戸口へ出て来る人があつた。源氏はうれしくて突然袖そでをとらえた。女

はこわいと思うふうで、

「気味が悪い、だれ」

と言ったが、

「何もそんなこわいものではありませんよ」

と源氏は言つて、さらに、

深き夜の哀れを知るも入る月のおぼろげならぬ契りとぞ思ふ

とささやいた。抱いて行つた人を静かに一室へおろしてから三の口をしめた。この不謹慎なちんにゆうしや闖入者にあきれている女の様子が柔らかに美しく感ぜられた。ふる慄え声で、

「ここに知らぬ人が」

と言っていたが、

「私はもう皆に同意させてあるのだから、お呼びになってもなんにもなりませんよ。静かに話しましょうよ」

この声に源氏であると知って女は少し不気味でなくなった。困りながらも冷淡にしたくはないと女は思っている。源氏は酔い過ぎていたせいでこのままこの女と別れることを残念に思ったか、女も若々しい一方で抵抗をする力がなかったか、二人は陥るべきところへ落ちた。可憐な相手に心の惹かれる源氏は、それからほどなく明けてゆく夜に別れを促されるのを苦しく思った。女はまして心を乱していた。

「ぜひ言ってください、だれであるかをね。どんなふうにして手紙を

上げたらしいのか、これきりとはあなただっと思って思わないでしょう」
などと源氏が言うのと、

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば訪はじと思ふ

という様子にきわめて艶えんな所があつた。

「そう、私の言つたことはあなたのだれであるかを捜す努力を惜しんでいるように聞こえましたね」

と言つて、また、

「何れぞと露いづのやどりをわかむ間に小笹こやさが原に風もこそ吹け

私との関係を迷惑に思ひにならないのだったら、お隠しになる必要はないじゃありませんか。わざとわからなくするのですか」

と言ひ切らぬうちに、もう女房たちが起き出して女御を迎えに行く者、あちらから下がつて来る者などが廊下を通るので、落ち着いていられずに扇だけをあとのしるしに取り替えて源氏はその室を出てしまつた。

源氏の桐壺きりつぼには女房がおおぜいたから、主人が暁に歸つた音に目をさました女もあるが、忍び歩きに好意を持たないで、

「いつもいつも、まあよくも続くものですね」

という意味を仲間ひじで肱や手を突き合うことと言つて、寝入つたふうを装うていた。寢室にはいつたが眠れない源氏であつた。美しい感じ

の人だった。女御の妹たちであろうが、処女であつたから五の君か六の君に違いない。太宰帥親王の夫人や頭中将が愛しない四の君などは美人だと聞いたが、かえつてそれであつたらおもしろい恋を経験することになるのだろうが、六の君は東宮の後宮へ入れるはずだとか聞いていた、その人であつたら氣の毒なことになつたというべきである。幾人もある右大臣の娘のどの人であるかを知ることが困難なことであろう。もう逢うまいとは思わぬ様子であつた人が、なぜ手紙を往復させる方法について何ごとも教えなかつたのであろうなどとしきりに考えられるのも心が惹かれていゝといわねばならない。思いがけぬことの行なわれたについても、藤壺にはいつもああした隙がないと、昨夜の弘徽殿のつけこみやすかつたことと比較して主人の女御にいくぶん

の軽蔑けいべつの念が起こらないでもなかった。

この日は後宴ごえんであつた。終日そのことに携わつていて源氏はからだの閑暇ひまがなかった。十三絃げんの箏そうの琴の役をこの日は勤めたのである。

昨日の宴よりも長閑のどかな気分満ちていた。中宮は夜明けの時刻に南殿へおいでになつたのである。弘徽殿の有明ありあけの月に別れた人はもう御所を出て行つたであらうかなどと、源氏の心はそのほうへ飛んで行つていた。気のきいた良清よしきよや惟光これみつに命じて見張らせておいたが、源氏が宿との直所いどころのほうへ帰ると、

「ただ今北の御門のほうに早くから来ていました車が皆人を乗せて出てまいるところでございますが、女御さん方の実家の人たちがそれぞれ行きます中に、四位少将、右中弁などが御前から下がって来てつい

て行きますのが弘徽殿の実家の方々だと見受けました。ただ女房たちだけの乗ったのでないことはよく知れていまして、そんな車が三台ございました」

と報告をした。源氏は胸のとどろくのを覚えた。どんな方法によって何女であるかを知ればよいか、父の右大臣にその関係を知られて媚なにしよとしてたいそうに待遇されるようなことになって、それでいいことかどうか。その人の性格も何もまだよく知らないのであるから、結婚をしてしまうのは危険である、そうかといってこのまま関係が進展しないことにも堪えられない、どうすればいいのかとつくづく物思いをしながら源氏は寝ていた。姫君がどんなに寂しいことだろう、幾日も帰らないのであるからとかわいく二条の院の人を思いやってもいた。取

り替えてきた扇は、桜色の薄様を三重に張ったもので、地の濃い所に霞かすんだ月が描かいてあつて、下の流れにもその影が映してある。珍しくはないが貴女きじよの手に使い馴ならされた跡がなんとなく残っていた。「草の原をば」と言つた時の美しい様子が目から去らない源氏は、

世に知らぬここちこそすれ有明の月の行方ゆくへを空にまがへて

と扇に書いておいた。

翌朝源氏は、左大臣家へ久しく行かないことも思われながら、二条の院の少女が気がかりで、寄つてなだめておいてから行こうとして自邸のほうへ歸つた。二、三日ぶりに見た最初の瞬間にも若紫の美しく

なつたことが感ぜられた。愛嬌あいぎょうがあつて、そしてまた凡人から見いだしがたい貴女らしさを多く備えていた。理想どおりに育て上げようとする源氏の好みにあつていくようである。教育にあたるのが男であるから、いくぶんおとなしさが少なくなりはせぬかと思われて、その点だけを源氏は危あやふんだ。この二、三日間に宮中であつたことを語つて聞かせたり、琴を教えたりなどして、日が暮れると源氏が出かけるのを、紫の女王は少女心に物足らず思つても、このごろは習慣づけられていて、無理に留めようなどとはしない。

左大臣家の源氏の夫人は例によつてすぐには出て来なかつた。いつまでも座に一人でいてつれづれな源氏は、夫人との間柄いちまつに一抹の寂しさを感じて、琴をかき鳴らしながら、「やはらかに寝ぬる夜はなくて」

と歌っていた。左大臣が来て、花の宴のおもしろかったことなどを源氏に話していた。

「私がこの年になるまで、四代の天子の宮廷を見てまいりましたが、今度ほどよい詩がたくさんできたり、音楽のほうの才人がそろつていたりしまして、寿命の延びる気がするようなおもしろさを味わわせていただいたことはありませんでした。ただ今は専門家に名人が多うございますからね、あなたなどは師匠の人選がよろしくてあのおできぶりだったのでしょう。老人までも舞って出たい気がいたしましたよ」

「特に今度のために稽古けいこなどはしませんでした。ただ宮廷付きの中でのよい楽人に参考になることを教えてもらいなどしただけです。何よりも頭中将の柳花苑りゅうかえんがみごとでした。話になって後世へ伝わる至芸だ

と思ったのですが、その上あなたがもし当代の礼讃らいさんに一手でも舞を見せてくださいましたら歴史上に残ってこの御代みよの誇りになったでしようが」

こんな話をしていた。弁や中將も出て来て高欄に背中を押しつけながらまた熱心に器樂の合奏を始めた。

有明ありあけの君は短い夢のようなあの夜を心に思いながら、悩ましく日を送っていた。東宮の後宮へこの四月ごろはいることに親たちが決めているのが苦悶くもんの原因である。源氏もまったく何人なにびとであるかの見分けがつかなかったわけではなかったが、右大臣家の何女であるかがわからないことであつたし、自分へことさら好意を持たない弘徽殿の女御の一族に恋人を求めようと働きかけることは世間体せけんていのよろしくないこと

であろうとも躊躇ちゆうちゆうされて、煩悶はんもんを重ねているばかりであつた。

三月の二十日過ぎに右大臣は自邸で弓の勝負の催しをして、親王方をはじめ高官を多く招待した。藤花とうかの宴も続いて同じ日に行なわれることになっているのである。もう桜の盛りは過ぎているのであるが、「ほかの散りなんあとに咲かまし」と教えられてあつたか二本だけよく咲いたのがあつた。新築して外孫の内親王方の裳着もぎに用いて、美しく装飾された客殿があつた。派手はでやしきな邸で何事も皆近代好みであつた。右大臣は源氏の君にも宮中で逢つた日に来会を申し入れたのであるが、その日に美貌の源氏が姿を見せないのを残念に思つて、息子むすこの四位少将を迎えに出した。

わが宿の花しなべての色ならば何かはさらに君を待たまし

右大臣から源氏へ贈った歌である。源氏は御所にいた時で、帝にみかどこのことを申し上げた。

「得意なのだね」

帝はお笑いになって、

「使いまでもよこしたのだから行ってやるがいい。孫の内親王たちのために将来兄として力になつてもらいたいと願っている大臣の家だうちから」

など仰せられた。ことに美しく装つて、ずっと日が暮れてから待たれて源氏は行った。桜の色の支那錦しなにしきの直衣のうし、赤紫したかさねの下襲すその裾を長く引

いて、ほかの人は皆正装の袍ほうを着て出ている席へ、艶えんな宮様姿をした源氏が、多数の人に敬意を表されながらはいって行つた。桜の花の美がこの時にわかに減じてしまったように思われた。音楽の遊びも済んでから、夜が少しふけた時分である。源氏は酒の酔いに悩むふうをしなからそつと席を立つた。中央の寢殿しんでんに女一にょいちの宮みや、女三の宮が住んでおいでになるのであるが、その東の妻戸の口へ源氏はよりかかつていた。藤ふじはこの縁側と東の対の間の庭に咲いているので、格子は皆上げ渡されていた。御簾みすぎわには女房が並んでいた。その人たちの外へ出している袖口そでぐちの重なりようの大ぎようさは踏歌とうかの夜の見物席が思われた。今日などのことにつりあつたことではないと見て、趣味の洗練された藤壺辺のことがなつかしく源氏には思われた。

「苦しいのにしいられた酒で私は困っています。もったいないことです。すがこちらの宮様にはかばっていただく縁故があると思いますから」

妻戸に添った御簾の下から上半身を少し源氏は中へ入れた。

「困ります。あなた様のような尊貴な御身分の方は親類の縁故などをおっしゃるものではございませんでしょう」

と言う女の様子には、重々しさはないが、ただの若い女房とは思われぬ品のよさと美しい感じのあるのを源氏は認めた。薫物たきものが煙いほどに焚たかれていて、この室内に起たち居いする女の衣摺きぬずれの音がはなやかなものに思われた。奥ゆかしいところは欠けて、派手はでな現代型の贅沢ぜいたくさが見えるのである。令嬢たちが見物のためにこの辺へ出ているので、妻戸がしめられてあったものらしい。貴女きじよがこんな所へ出ているとい

うようなことに賛意は表されなかったが、さすがに若い源氏としておもしろいことに思われた。この中のだれを恋人と見分けてよいのかと源氏の胸はとどろいた。「扇を取られてからき目を見る」（高麗人こまうどに帯を取られてからき目を見る）じょうだん戯談らしくこう言つて御簾に身を寄せていた。

「変わった高麗人こまうどなのね」

と言う一人は無関係な令嬢なのであろう。何も言わずに時々溜息ためいきの聞こえる人のいるほうへ源氏は寄つて行つて、几帳きちよう越しに手をとらえて、

「あづさ弓いるさの山にまどふかなほの見し月の影や見ゆると

なぜでしょう」

と当て推量に言うと、その人も感情をおさえかねたか、

心かたいる方なりませば弓張ゆみはりの月なき空に迷はましやは

と返辞をした。弘徽殿こきでんの月夜に聞いたのと同じ声である。源氏はうれしくてならないのであるが。

「一冊堂・青空文庫」について

「一冊堂・青空文庫」は、青空文庫を紙の書籍で読むことができるよう、公開されているデータを pdf 形式に変換して、無料で配信させていただいております。変換に際して、旧仮名使い、ルビ等がうまく変換されない場合があります。できるだけ修正するようにしておりますが、お気付きの場合、ご連絡をいただければ、早急に修正データをアップロードいたします。ご協力いただきますようお願い申し上げます。

青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp>) は、著作権の消滅した作品や「自由に読んでもらってかまわない」とされたものを、テキストと XHTML (一部は HTML) 形式で公開しているインターネット電子図書館です。青空文庫は、そのサイト運営も含め、電子データの作成や校正作業などはボランティアの皆さんの活動によって支えられています。



一冊堂・青空文庫 pdf データ

2016 年 3 月 15 日 第一期製作

原 稿 青空文庫

発行者 佐藤 聖

発行所 一冊堂

〒165-0025
東京都中野区沼袋 2-32-5 幸荘 C 室
mail : issatudo@gmail.com
